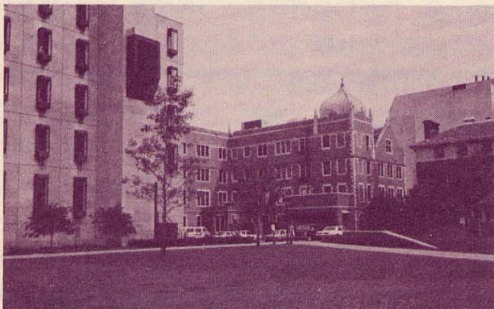


らい 来ぶらり 11

最新・アメリカ図書館事情



シカゴ大学のキャンパス

■ 美しいキャンパス

今年の8月17日から31日まで2週間、アメリカのシカゴ・ボストン・ニューヨークをまわり、大学図書館などを見学する機会に恵まれました。学習院事務職員の海外研修によるものです。

最初に訪問したシカゴ大学で、まずそのキャンパスの大きさ美しさ后感嘆しました。広い緑の中に、思い思いの様式の建物が調和を保ちながら並んでいるのです。そして、日曜日に観光バスで通った時はがらんとしていた構内も、ウィークデーには車がいっぱい、駐車スペースがなかなか見つかりませんでした。夏休み中も活発に行われている研究活動の熱気が伝わって来るようでした。

■ 午前1時まで開館

シカゴ大学の蔵書数は全体で500万冊(学習院は70万冊)、開館時間は午前8時30分から午前1時まで(夏休み中は午後5時まで)です。図書館が開いている時間帯は、学内をバスが走っていて、料金は午後6時以降無料になります。これで、学

生は寮と図書館の間を安全に往復できるわけです。

ノーザンイリノイ大学は、シカゴから、とうもろこし畑の間のハイウェイを車で1時間半の所にあります。図書館は午前2時閉館です。ここでは、閉館後、歩いて寮に帰っても、途中アヒルに会うだけで全く危険はないと、日本からの女子留学生が話していました。

シカゴ大学にない本については、相互貸借制度により、イリノイ州内にあれば2週間、州外なら数週間から数ヶ月のうちに図書館が本を借りてくれます。雑誌は日本と同じで、コピーを有料で入手することになります。

こうして、ワシントンにあるアメリカ議会図書館の日本部門は、その蔵書60万冊のうち、100冊は常に外部に貸し出している、とのことでした。

■ MITの新計画

図書館の中いたる所で、コンピュータの端末機が目につきました。貸出も相互利用も、レファレンスも目録カード作成も、図書館員は端末機をかたわらに仕事を進めていました。

利用者も、図書借用の更新手続きや目録の検索に、端末機を使用しています。

コンピュータ利用では、マサチューセッツ工科大学(MIT)で、「プロジェクト・アテナ」という、2年後をめざした計画の紹介がありました。構内に端末機を3000台備えつけ、寮からでも、教授は自宅のパソコンからでも、24時間利用できるシステムです。

図書館関係について言えば、利用者は居ながらにしてこの端末機から目録を調べたり、レファレ

ンスを依頼したり、他の大学からの本の借用を申し込んだりできるのです。このシステムの利用は、すべて無料の予定だとのことでした。

これが図書館のコンピュータ化の、ひとつの未来像に違いありません。でも、「そうすると、授業料はいくらになるのだろうか？」と、一緒に見学した人達の間で話題になりました。

以上、駆け足で見学した一端を紹介しました。

■ IFLA大会

シカゴで8月17日から24日まで、国際図書館連盟(IFLA)の第51回大会があり、83ヶ国から1460名が参加しました。日本からの参加者は60数名でした。この大会にむけて、日本図書館協会企画のツアーが出ましたので、私もそれに加えてもらっ



ノースウェスタン大学図書館のカウンター

たのでした。第52回大会は、来年8月24日から29日まで、東京で、青山学院と国立劇場を会場として開かれます。

この2週間、ツアー参加の皆さんに助けられながら、いろいろな図書館で多くを学んだ視察旅行でした。(洋書係 広瀬淳子)

本がくさってゆく!?

——酸性紙劣化の現状

ある日、書庫から取り出した本の頁が枯葉みたいに赤茶け、指でめくると縁の辺からぼろぼろ形もなく崩れてゆく。こうした現象が1970年代から欧米諸国に出はじめ、米国議会図書館などでは一般単行書の $\frac{1}{3}$ がかなりの被害を受け、200万冊が利用不能に近い状態だったという。

正倉院には1200年も経た記録が保存されており、紙は半永久的に残るものと決めこんでいた日本でもこの種の劣化現象が表面化し、関係者を狼狽させている。古くから「和紙千年、洋紙百年」といいながらも、紙自体のこうした変質・崩壊は予想外だったのである。手すきの和紙は植物の靱皮繊維から作られ、強度も耐久力もあるが、洋紙は普通、碎木パルプが原料で、「にじみ止め」に硫酸アルミニウムが多量に添加されている。それが紙のセルロースを長期間に加水分解し、繊維をずたずたにしてしまう。微生物・虫害などもこれに比べれば2次的要因に過ぎない。

米国議会図書館では数百万ドルをかけ、独自のガス吹きつけによる脱酸処理方式を開発し、実用化も間近いという。これにより紙は弱アルカリ化し、寿命が数倍のびるが、1冊につき数ドルという金もかかる。国立国会図書館でも「酸性紙対策

班」を設置し、洋紙を用いた初期の資料の劣化防止に取り組んでいる。その調査によると、第2次大戦と関連する1940~50年代のものがひどく、折り曲げるだけで紙が切れるものが2割位もあったそうだ。また、今後の出版物の「中性紙への切り替え」も検討されつつある。

アルカリ性の炭酸カルシウムが使用されている「中性紙」は、変質・変色などへの耐久性にすぐれたもので、欧米ではすでに出版物の半分近くをこれに転換している。わが国でも、最近、大手メーカーがその普及を推進しており、図書・ノート類の他、コピー用紙などを含めて国産では20%を占めると推定されているが、既刊資料の酸性紙劣化対策はまだこれからというのが実状である。安価で効率的な脱酸方式の開発や、その利用のための機構など、公的・私的を問わぬ幅広い協力体制が必要である。

「情報の宝庫」である図書館も、ただ傍観しているだけでなく、保存環境の改善やマイクロ化などの手段により、原資料の劣化を最小限に食い止め、自らの宝を後世に伝達する責任を担っているとも言えよう。〔参考文献：田中梓「図書の保存対策と国立図書館」〈「びぶろす」第34巻8号〉(運用課長 境 経夫)

「眠っている建物」に非ず

勤続20年の節目の春に、突然、大学図書館へ配属の命が下った。今まで、短大や初等科で、就職や教務関係の仕事が主だっただけに、茫然自失。過去の経験がどれほどの役に立つか疑問を抱きつつ、全く初歩からのスタートとなってしまった。図書館用語はもとより、ごく自然に交わされる言葉さえ耳慣れず、いちいち質問するなど、周囲の方々に負担をかける辛さと、戸惑いの日々が続いている。

そんなある日、雑談中に、図書館を「眠っているような建物」と評した方があった。数ヶ月前の私をはじめ、部外者には多かれ少なかれ、そんな印象があるのではなからうか。静かで、勉強できそうで、汚れることもなく、比較的楽な仕事のように思われがちである。事実、そんな声に送られて来たのだが、それは、「静かなこと」を除けば、まったく誤解である。本に触れながらも、読む暇

など無く、時として触れるのさえおぞましいほど汚れた本と格闘することもあり、他人さまが思うほど楽な仕事ではない。

「図書館」といえば、貸出などのカウンターの仕事が始まりに浮かぶが、中に入ってみて、その仕事量の多さに驚かされた。第1に、支部に比べ、研修を受ける機会が多いこと。仕事の性質上、サービスの向上を目指すためには、まず、個人を高めなければならないのであろうが、よく考えれば、こういった意味の研修は、一般事務職にとっても同じぐらい必要なのではなからうか。第2に、会議が多いこと。これは、大所帯のためもあるし、また、各課ごとのミーティングのほかに、選書・館報・ビデオ・機械化などについて、それぞれ委員会が開かれたりするためでもある。

総じて、各人とも、仕事内容は、かなりハードのように見受けられる。「眠っている建物」どころか、むしろ、利用されやすい図書館を目指して、「おおいに奮闘している建物」だと、印象づけられた数ヶ月である (受入係 松尾節子)

書物の風景——⑩

法経図書室

「ユスカ? アラスカの子分でもないし、今年の夏発見された新種の蚊の名前?」「いいえ、第1ヒント、U.S.C.A.」「何かの頭文字? アメリカに関係あり?」「そうです。『United States Code Annotated』の略称。訳すと『注釈連邦法令集』」「法令集といえば、日本の六法全書のようなものですか?」

「そうですね。しかし、ア『ユスカ』を知っていますか? アメリカの法律制度は、日本とちょっと違うのです。」

アメリカは50の州から成る連邦国家ですから、法律も連邦法と州法との二本立て。なにしろ各州がそれぞれ憲法までもっているのです。

連邦法は合衆国全体に関する法律。たとえば、独禁法・破産法・特許法などは古くから連邦法の分野ですが、近年では、環境保護・教育・離婚の際の子供の取り合い、あるいは各州にまたがる犯罪……というような分野でも、重要な連邦法が増えつつあります。

U.S.C.A.には、合衆国憲法とこのような連邦法が収められています。連邦法は50のタイトル(主題別)に分けられています。求める法律がどのタイトルにはいるかは、巻頭のタイトル・リストから見当をつけてもよく、また、別巻の総合索引から言葉で引くこともできますし、法律の通称からも調べられます。この法令集の便利なところは、条文だけでなく、注釈を初め、関連事項への参照が完備していて、さまざまなことを有機的に調べられる

点です。たとえば、法律の制定・修正などの変遷過程、

各法律を解釈するのに役立つ判例名とその要旨等々…。その点では、日本の『模範六法』が少し似ているかも知れません。法律書の出版で有名なWest社の発行。

このU.S.C.A.とともに連邦の「判例集」も、法経図書室でみなさんをお待ちしています。まずは一度自分の手にとってみて、使いこなしてみませんか。

(法経図書室 太田さち子)

参考室あれこれ

「大蔵省国際金融局長行天氏の特集を、外国の雑誌が組んだという記事が、ここ1ヶ月の新聞に載った。雑誌の記事を見たい」という依頼。

まず新聞記事を探して、雑誌名を判明させなくては。経済関係なら『日本経済新聞』と見当をつけ、6月1日-7月10日分を見る。なし。急ぐので、大蔵省国際金融局に問い合わせる。

「記事はとっておいたが捨てた。雑誌名はわからない」という回答。朝日新聞社と毎日新聞社に電話をかける。毎日新聞6月1日(夕刊)の記事とわかる。(『週刊朝日』でも取りあげた)。該当の記事には、「英国の経済誌『インスティテューショナル・インベスター』(国際版)5

月号」と出ていた。次は所蔵館探し。『学術雑誌総合目録 欧文編』を見ると、東京経済大学図書館で1974年-1977年分を所蔵している。現在も購入しているといいのだが……。電話をしてみた結果は、やはり上記の分のみを所蔵。

ふと、「日本証券経済研究所」の友人が思い浮かぶ。「確かに取っているが、4月号までしか来ていない。東証(東京証券取引所)から借りてコピーを送る」という頼もしい返事。数日後、着物姿の行天豊雄氏を紹介した雑誌記事を入手。

資料入手は、依頼者→図書館(所属する)→図書館(資料所蔵館)のルートを取るべきであるが、今回は人脈に頼ってしまった。急ぐ時は方便と許してほしい。

(参考係 久保田安子)

この秋も、「来ぶらり」ビデオとセミナー

●「来ぶらりビデオ」

今年度は、毎週火曜日の午後3時から、ある程度、授業に関連するような番組を、そして、月1回土曜日の午後映画を放映しています。10月以降は、火曜日に歌舞伎・美術関係など、土曜日の映画は「スターウォーズ」などの放映をしています。みなさんのご参加をお待ちしています。

なお、放映中の音量については、充分気をつけているつもりですが、ビデオコーナーが3階閲覧室と隣接しているため、時には、室外に音がもれて、閲覧室ご利用の方にご迷惑をかけてしまうことがあります。しかし、ビデオ放映も図書館活動のひとつとして、ぜひご理解ください。

●「来ぶらりセミナー」

いよいよ好調のセミナー。前期の2回に続いて、今月は第3回目。「外国文献入門-文献目録の読み方」と題し、10月19日(土)に実施します(詳しくは下記「お知らせ」をごらんください)。

以下、第4回:11月16日(土)「百科事典の使い方」 番外篇〈製本教室〉:12月上旬「文庫本を特製本につくりかえる」と続きます。

前回参加した方はもちろん、今回初めて参加する方も、「聞いて楽しく、知つてためになる」当セミナーに、ご期待ください。

お知らせ

○大学祭の期間中は閉館します

10月31日(木)から11月5日(火)まで、展示会場として使用されますので、閉館します。

日時:10月19日(土) 午後1時30分~3時30分

会場:大学図書館3階会議室

定員:20名(先着)

会費:300円

○第3回「来ぶらりセミナー」

外国文献入門-文献目録の読み方

申込みは10月7日(月)より、2階カウンターで受け付けます。

来ぶらり No.11 1985年10月1日発行

発行責任者:波多野里望

編集委員:種田昭平 中山高二

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221